

Essay

支援を目的としない「聞き書き」の可能性——介護民俗学の実践

民俗研究者／デイサービス「すまいるほーむ」管理者・生活相談員

六車由実

むぐるま ゆみ



「すまいるほーむ」での聞き書きの様子

「私はね、子どもにあげるお乳が出なかったの。だからヤギのお乳を夜中に消し炭で温めてあげたのよ」
 「うちのまわりにもヤギを飼っている家があったね、ヤギが死ぬと『ハム屋に売らなきゃ』って、子どもの前でも平気で言ってたっけ」
 「このあたりは、ヤギを飼っている家は多かったね。川つぶちにつないでおいで草を食ませてたよね」

これは、ある日のデイサービス「すまいるほーむ」での、利用者さんたちの会話である。利用者さんたちの口から次々に飛び出し、つながっていく記憶の断片に私の心は躍りだし、メモをとらずにはいられない。庶民の生活史を記録し、研究していく民俗研究者としては食指が動く瞬間だ。「ふんふんそれで？」と会話に割り込んで聞き書きを始める私に、利用者さんたちは半ばあきれながらも、孫に教えるかのように、さらに詳しく語ってくれる。毎日このようなりとりが重ねられていき、「すまいるほーむ」での聞き書きの記録はどんどん分厚くなっていった。

これまで介護の現場でも利用者の話を聞くことは「傾聴」と呼ばれ重視されてきた。傾聴では、利用者の不安定な気持ちや不安げたり、抱える問題を解決

したりすることが目的とされる。もちろん、さまざまな不安や生活課題を抱えた高齢者にとっては、支援を目的とした専門職による傾聴が必要であることは言うまでもない。だが一方で、支援を目的としない聞き書きがあってもいいのではないか、というのが私の介護民俗学の発想である。

アカデミズムから転職して入った介護現場で、私が驚いたのは、利用者さんたちの過去についての記憶の確かさとそれを語る言葉の豊かさである。それは認知症の方であってもまた然りである。彼らの話を丁寧に聞き書きしたら、地域や時代を知るための貴重な資料となるに違いないのだ。そして、その聞き書きにおいては、支援を目的とした傾聴とは立場が逆転し、八〇年、九〇年という時間を生き抜いてきた高齢者が、未熟な私たちにさまざまなことを教える師となる。

そうした聞き書きのあり方が、結果的に、孤立しがちな高齢者の自信や社会的役割の回復につながっていくのかもしれない。これを広い意味での支援ととらえることができるか、と今、私は考えている。

一九七〇年生まれ。民俗研究者。デイサービス「すまいるほーむ」管理者。社会福祉士。二〇〇八年東北芸術工科大学准教授を退職し、介護職員に転職。一二年十月から現職。「介護民俗学」を提唱し実践する。著書「神、人を食う」(第二回サントリー学芸賞受賞)、「驚きの介護民俗学」(第二〇回旅の文化奨励賞受賞)。

